

けんせつ小町が提起する女性活躍時代

けんせつ小町の登場

国際機関OECD（経済協力開発機構）の報告（二〇二三）によると、世界一・二カ国を対象に四三種類の職業の男女の就業比率の調査では、女性比率が半分以上の職業は保健業（六九%）、教育業（六八%）、法務・社会・文化業（五三%）、経営管理業（五一%）など一七の職業である一方、男性比率が半分以上の職業は農林漁業（六二%）、機械運転業（六八%）、生産管理業（六九%）、情報通信業（八〇%）など二六の職業であり、最大の比率は建設関係の九七%で女性は三%でしかない。

ところが最近の日本で、この建設関係の仕事に女性が急速に進出する傾向が登場してきた。それも建築設計などの室内作業ではなく、土木工

事の現場管理の作業である。意外の

ようであるが、実証する数字がある。G7の七カ国の建設業就業者の女性比率という調査の二〇二三年の数字で日本は一位で一八%になっている。両者で数字が大幅に相違するが、前述のOECDの調査は対象国数が一・二カ国と桁違いに多数のためである。

この建設業界に就業する女性のうち、土木施設の設計のような室内作業ではなく、工事を管理する現場作業に従事する女性の就労を建設業界の団体である日本建設業連合会（日建連）が推進支援する体制を二〇一四年に発足させ、翌年「けんせつ小町」と名付けた。かつて日本の土木工事の伝統を反映し、労働基準法六四条の二によりトンネルの工事現場には女性は参加できないと規定されていた時代とは雲泥の相違で

ある。

3Kではない「けんせつ小町」の職場

「けんせつ小町」の現場進出は迅速に実行され、二〇一四年には東京外郭環状道路と京葉道路を接続する交流地点の工事で「チームなでしこ外環田尻」という名前で女性約一〇名が現場を管理する組織が結成され、五年以上になる大型工事の現場に参加した。そのために女性専用の便所や休憩施設を設置し、快適な環境を用意した結果、人気の職場となり、以後の一年で五三の現場組織が結成され、急速に女性の現場進出が進展していった。

この機運が後押しし、二〇一五年には日建連の内部に「けんせつ小町委員会」が設立され、業界として女性の活躍を推進する体制が実現し

た。しかし一〇〇〇年単位で男性が独占してきた工事現場の変革のためには、相当の覚悟も必要であり、出発するにあたっての文書には「多年馴染んだ儀儀が通用しなくなることを理解し、覚悟しなければならぬ」という宣言が掲載され、女子小中学生を現場見学に招待するなど入念な応援活動も実施された。

しかし「けんせつ小町」が活躍している僻地の現場を紹介すると、旧来の工事現場の知識がある人々には革命であることを実感する状況である。休憩施設は仮設の建物ではあるものの、台所も便所も休憩する部屋も用意されており、これまでの3K（きつい／汚い／危険）職場は消滅し、新規の3K（給与／休暇／希望）職場に変貌している。生活の視点からは窮屈な都会の休憩施設よりも十分に余裕のある空間になっている。

四万時間時代への一歩

ここまで日本の建設業界で女性が活躍する現場の変貌を紹介してきた

が、社会全体として評価すると日本は女性活躍の後進国家である。いくつかの事例を紹介する。国政を維持する国会議員の女性比率は一九%で一八六カ国中一三九位。OECD加盟三八カ国で大学等教員の女性比率の上位は五〇%以上であるが、日本は二三%で最下位。職業全体の女性比率の平均は四三%であるから、日本は極端に低率ということになる。

企業社会についても同様の傾向がある。管理職の女性比率（二〇二三）は上位のスウェーデンが四四%、アメリカが四三%、オーストラリアが四一%、イギリスが四〇%であるが、日本は一五%である。このような国際比較を見ると、日本の若手の女性が工事現場で仕事するのは時代の潮流に逆行しているようであるが、どのような目標のために仕事をするのかを考察すると、意外に労働社会の将来を見通した潮流でもある。

六一年前の一九六五年にフランスの経済学者J・フーラスティエによる『四万時間』という著作が話題に

なった。やがて人間が生涯に労働する時間は四万時間になり、約七〇万時間の人生の六%を労働するだけになるという趣旨である。日本の現状では通勤時間を除外した生涯労働時間は八万八〇〇〇時間であり、四万時間には程遠いが、その方向には進行している。このような視点から女性が仕事をするという現象も考察する必要がある。

今回紹介した内容は人口減少で人手不足になった日本で女性を新規の戦力にするという目先の課題の解決という視点で理解する現象ではない。これまでの労働の主力であった男性を中心とする社会構造を女性の視点から再編するという巨大な社会転換を背景にした現象とすべきである。半世紀以上に北欧を旅行したとき、道路工事の現場で女性が何人も仕事をしている光景に驚嘆した経験があるが、現在を先行していたのである。

東京大学名誉教授
つきお よしお
月尾嘉男



昭和一七（一九四二）年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究する。とともに、全国各地で私塾を主宰し、地域の有志と共に環境保護や地域計画に取り組む。